

Salon

～「楽市フォーラム」提供～

楽市こぼればなし

ドイツ化学史の旅

西村三千男

2011年2月の「楽市フォーラム」に「ドイツ化学史の旅」の話題を提供した。諸先生、諸先輩の前で、このようなカジュアルな拙講で恥を曝すことになった発端は、2010年秋の電気化学会の産学フォーラム（於：東工大）懇親パーティ。山内繁先生、吉祥瑞枝先生、美浦隆先生、石渡佐敏事務局長と立ち話をする中で、得々と旅の自慢話をしていたのを吉祥先生が聞き咎められ、お誘いを受けたのである。

「楽市フォーラム」の当日は旅先の写真など自分たちにとっては思い入れタップリのスライドをお見せした。この「こぼればなし」では、私たちが^か斯かるユニークな旅を始めた経緯と旅のコンセプトをご紹介します。

私たちの旅の正式名称は「アイソマーズ・ドイツ化学史の旅」。アイソマーズは京大工学部・工業化学科1958年学部卒業の同級会の愛称である。卒業と同時に将来の伴侶も自動的にメンバーとする約束で発足した。アイソマーズには各界、各方面で活躍した、または今も活躍中の仲間が多い。2～3年に1回のペースで夫人同伴の総会をやっている。京都で開催することが多いが、京都以外の各地や海外も何度か実績がある。2003年秋の奥飛騨総会で「次回の総会はミュンヘン開催!!!」と申し合わせた。それには訳があった。メンバーの1人で東レOBのMさんが悪性リンパ腫に罹って、体調不良から弱気になっていた。Mさんは若かりし頃、1960年代にミュンヘン大学に留学した。そのミュンヘンでアイソマーズ総会をやればMさんを激励することになる……と思ったからであった。その席で、もう一人の東レOBのTさんが「総会をミュンヘンで開催するのなら、『ドイツ化学史の旅』としよう」と提案した。Tさんは大学在学当時から山岡望著「化学史談Ⅰ～Ⅷ」を読んでいたのであった。

それから旅の参加者を募り、旅の構想を練り、準備して、第1回目の旅が漸く実現したのは2005年6月であった。残念ながら、肝心の激励すべきMさんは奥飛騨総会の少し後に病没、我々はMさんの遺影を携えてミュンヘンへと旅したのであった。

旅の準備を主導したのは三菱レーヨンOBのIさん。アイソマーズの2代目会長、旅のリーダーでもある。山岡望先生の上掲著書などを丁寧に読み込んで、その抄録をホームページ「アイソマーズ通信」(脚注参照)に次々と連載した。山岡先生の情緒的な導きとIさんの感性とが融合して、旅のコンセプトは「19世紀ドイツ化学界の4人の巨星（リービッヒ、ヴェーラー、ブンゼン、ケクレ）の史跡を巡る」ことに定まった。19世紀初頭、化学の先進国はイギリス、フランス、

スウェーデンであり、ドイツは化学後進国であった。この4巨星の大活躍によって、僅か数十年でドイツは追いつき、追い越し、化学と化学工業の一流国へと変身したのである。20世紀にドイツが化学工業大国～経済大国～軍事大国となる礎は「4巨星の化学」であった。19世紀ドイツ化学史の現場に立って、科学と技術と産業を思索する旅を企画した。

当初は、このコンセプト旅行は1回ではなく、多分2回で完結するだろうと漠然と考えていた。1回目にリービッヒとブンゼンを、2回目にヴェーラーとケクレを割り振って旅仲間で旅に出かける前の調査を分担した。旅のコリダーFさんはまことに好都合な仲間である。三井物産の技術部長から早期退職して、自ら技術貿易の会社を起業して現在も経営している。年に数回はドイツへ出張している。出張の機会に私たちの訪問先の予備調査、予備折衝をやってくれる。お陰で私たちは旅先で予定された訪問客としてスムーズに歓迎されるのである。

そして実現した旅の姿は…



写真1 旅先の現地を訪ねた史跡から厳選した1枚（ミュンヘン市マキシミリアン広場のリービッヒ像）。